

地域情報（県別）

【神奈川】「認知症対応は人薬（ひとぐすり）が大事」地域で支える仕組みづくりを-内門大丈・メモリーケアクリニック湘南院長に聞く◆Vol.2

2024年6月、平塚の認知症カフェ内に診療所開設

2024年11月1日（金）配信 m3.com地域版

認知症の早期対応や高齢者医療に注力しつつ、在宅医療とオンライン診療も行って地域のかかりつけ医を目指す「メモリーケアクリニック湘南」（平塚市）。内門大丈院長はクリニックのかじ取りを担うほか、地域活動にも熱心だ。平塚市に認知症患者と家族が集える古民家の開設を発案し、音楽を楽しめる場もつくった。さらなる構想もあるようだが、母校・横浜市立大学医学部の臨床教授も務める内門氏がなぜ地域に入れ込むのか。（2024年8月30日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら



内門大丈氏（クリニック提供）

認知症初期集中支援チームで地域の人を医療につなぐ

——メモリーケアクリニック湘南は平塚市から認知症初期集中支援事業を受託し、また、神奈川県から連携型の認知症疾患医療センターに指定されています。それぞれの役割をお聞かせください。

認知症初期集中支援事業は、認知症の症状で困っているものの何らかの理由で医療・介護とつながれていない40歳以上の在宅生活者に対して、適切な医療・介護サービスが受けられるようサポートする取り組みです。同事業を受託する認知症初期集中支援チームは各自治体に設置されていますが、地域包括支援センターに設けられているところが多く、医療機関での設置は11%、当院のように認知症疾患医療センターに設置されているところは6%とさらに少ない状況です。

認知症疾患医療センターとは文字通り、認知症に関する相談や診療に応じる専門機関であり、「地域における認知症対策の拠点」という位置づけです。「基幹型」「地域拠点型」「連携型」の3つがあり、当院は地域の医療・介護・保健機関などとの連携を推進する連携型に該当します。

認知症初期集中支援事業では通常、チームのスタッフが対象者のご自宅に訪問して外来受診を促すことが基本になりますが、その点、当院では院内の多職種がチームメンバーとなっているため連携がしやすく、また認知症の外来診療を行いつつ在宅医療も実施しているので、外来受診の提案ならびにアウトリーチもしやすいのが特長です。

多職種とのつながりからSHIGETAハウス実現へ

——内門先生は地域活動も積極的に行っている印象です。過去に取材した日本認知症ケア学会の繁田雅弘理事長が行っているプロジェクトにも協力していますね（詳細は【東京】「認知症になっても安心できる町へ」大学教授が実家を改装して患者向け施設を運営-繁田雅弘・東京慈恵会医科大学精神医学講座教授に聞く◆Vol.2）。

繁田先生は神奈川県平塚市にある実家を改装し、2019年に認知症の患者さんや家族が集える施設「SHIGETAハウス」を開設しました。私は繁田先生のお母さまの主治医であり、外来でお付き合いが始まってから在宅医療に移行し、その後、お母さまは認知症のため一人暮らしが難しくなり施設に入所されました。このとき、ご自宅が空き家になり空き巣の被害にも遭うようになってしまいました。

繁田先生は「患者視点の医療」をモットーとする、認知症患者さんへの思いあふれる先生です。そんな先生の専門性や人柄を知っていたので、空き巣の問題を先生から聞いていた私は、「それでしたら、地域の皆さんの会合に使いませんか」と提案しました。認知症の患者さんやご家族、認知症に関わる多職種の集いの場をつくれれば良いのではないかと。

——繁田先生は「内門先生が地域のさまざまな人とつながっていたから」実現に進んだと話していました。

私は地域でいろいろなことをするのが好きなんです。過去には江の島でカフェを運営していて、そこでは認知症カフェも開いていました。在宅医療の実施や行政との連携などで地域の医療・福祉・行政職のほか、弁護士や税理士などとも関係がありました。多職種で意見交換を重ねるなかで「SHIGETAハウス」のコンセプトや機能が決まっていき、現在は多様な活動ができています。

認知症の人とご家族、施設スタッフが交流する「平塚カフェ」のほか、モデル事業時から参画している「認知症の人と家族の一体的支援プログラム」、繁田先生が認知症について教え、認知症ケア専門士の単位を取得できる「SHIGETAの学校」、不定期の開催ではありますが、平塚市の農園の協力で農業体験ができる「土と畑」などが挙げられます。

——内門先生が運営する医療法人社団彰耀会は2024年6月、SHIGETAハウス内に「栄樹庵診療所」を開設しました。認知症カフェが併設されているクリニックを取材したことがありますが、認知症カフェの中に診療所機能があるのは珍しいと思いました。

栄樹庵診療所は繁田先生が週に4日診療する予約制のクリニックであり、ハウス内に診察室があります。繁田先生は認知症患者さんへの精神療法を大切にしており、ゆったりとした古民家の空間で診療するのもまた先生の志向に合うだろうと思い、ご提案しました。ともすれば無機質になりがちな院内に比べて、リラックスして相談しやすい環境は患者さんやご家族にポジティブに働くのではないかと、とも考えました。

「認知症患者を地域で支えたい」モデルケース構築目指す

——内門先生は外来・在宅・オンラインそれぞれで診療を行い、また現在は母校である横浜市立大学医学部の臨床教授を務めます。なぜ、地域活動にも力を入れているのですか。

これまでに多くの認知症患者さんを診てきたことが影響しています。認知症の診療を重ねていると、医学的な力ではなく、人との交流によって患者さんのBPSD（行動・心理面の症状）が改善した例が少なくなかったんですね。私はこれを「人薬（ひとぐすり）」と呼んでいます。家族や周囲、そして地域の人との関わりがいかにかに認知症患者さんにとって効果的であるかを実感しています。認知症は誰もがなり得る病気で、治るものではありません。病気を抱えながら生活を続けていく必要があるため、患者さんを「地域全体で支えていく」ことがとても大切だと思います。

地域活動としてはほかにも、2023年に日本音楽医療福祉協会代表理事の落合洋司さんと「音楽ひろば」を立ち上げ、認知症患者さんやご家族、医療従事者がウクレレなどの音楽に合わせて童謡などをうたうサロンを定期開催しています。さらに今は、友人と一緒に、平塚市の海近くにあるダンススタジオで、認知症患者さんを受け入れる場をつくっています。

加えて、「医療」と「衣料」を掛け合わせた活動ができないかも検討しています。私は洋服の仕立て屋の息子なんです。例えば医療と「衣食住」の関連では、健康的な食事の研究は以前から進んでいますし、また、スマートホーム化によって認知症の人を支える取り組みも生まれています。その一方で、「衣」の面はあまりアプローチされていない印象を受けます。認知症の患者さんが好きだった服を仕立てて提供するなどして幸福感に寄与できないか、などと構想をめぐらしています。

認知症の患者さんを支える仕組みをつくるためには、地域を深掘りしていくことが重要だと私は感じています。さまざまな業種の方と知り合い、ネットワークを広げて一つの地域モデルをつくる。「一隅を照らす、これすなわち国宝なり」という言葉があるように、私たちの活動をほかの地域の方々に参考にいただき、それが広がっていけば——そんな展望も描いています。

◆内門 大丈（うちかど・ひろたけ）氏

1996年横浜市立大学医学部卒。1998年に伊豆通信病院（現NTT東日本伊豆病院）精神科に入職し、2000年横浜市立大学大学院（精神医学専攻）に進学。米国メイヨークリニックへの研究留学後、横浜南共済病院神経科部長などを経て2011年に「湘南いなほクリニック」院長。2022年に「メモリーケアクリニック湘南」を開設。横浜市立大学医学部臨床教授。平塚市医師会副会長。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

